

医療側の後ろめたさを誘因とする暴走が、
問題を複雑にし、両方の当事者に
深い傷と満たされない思いを長く残してしまうのではないのでしょうか
原田正平（大学教員・小児科医）

紀子さん

ゆきさんの乃木坂スクールのお約束として、講師の方は〇△先生ではなく、例えば子ども時代の愛称などと呼ばれるので、今回は紀子さんと書かせていただきます。

お話を伺って、最初に感じたことは、質問させていただいたように、医療者側と紀子さんご家族側のすれ違いがどこにあったのかということでした。

私の理解では、ご家族側は、目の前で苦しんでいるお父様に適切な対応がなされずに亡くなってしまったことへの悲しみとその後の怒りがあった。その経過について説明を求めたのに、医療者側が不自然なくらいの防御態勢をとった。そのことが不思議でした。

さらには、それが実は虚偽説明をしたうえでの「保険会社」への丸投げだったことが、裁判で明らかになっていくことも、さらに不思議でした。

セルシンという鎮静剤には呼吸抑制作用もあって、一連の経過からいうと、術後の創部からの出血による気道閉塞による呼吸困難があった状態で鎮静をかけたことが、最終的な窒息状態をもたらしたように思われ、医療者側もそれを十分認識していたのではないかということです。

ただご家族にとっては、そうした医療側のそうした企みはわかりませんから、病理解剖所見の改ざんなど医療側のおかしな行動がさらなる不信感を招き、裁判が終わって今に至っても、本当の意味で、何があったのかわからない状態に終わってしまったように思われてなりません。

永井裕之さんの奥様の事件や豊田郁子さんの息子さんの事件の例のように、医療過誤が明白であっても解決に時間がかかり、被告側にも原告側にも大きな負担をもたらしますが、医療事故調の設立のきっかけになった点では、大きな意味を見出すことができます。

しかし、実は多くの医療事故裁判は、紀子さんご家族の場合のように、医療側の後ろめたさを誘因とする誤解に基づく暴走が、問題を複雑にし、医療側

その間、家族も病院も一体何にエネルギーを注いだのか・・・、もっと建設的なことに注げるようにどこかで舵取りが出来なかったのだろうか、改めて思ってしまう。

ただ、当時の私は、やはり感情も高ぶっていました。

そして今穏やかな気持ちでいられるようになるまでにも、もう一度かなりのエネルギーが必要でした。

望まずして事故に遭い、とても恨んだのですが、その後、意図せずとも尊敬できる医療者に出会ったり、人間的な場面を垣間見たりしました。

そのことで気持ちも回復していきました。

今回は父の事故を私の立場から話させて頂きました。

でも、当事者の医師だったら、看護師だったら、もしくは副院長だったら、またそれぞれ違った話になるはずです。

理不尽な思いも抱えていらっしゃると思いますし、私の知らない事実もたくさん知っておられるはず。その話を聴けないのに、自分だけがこうして事故のことを話したことに、バランスのない不安を感じることもあります。

でも、私はやはり自分の体験を話すことしかできず、共通の思いに関しては他の遺族の代弁の役目もあると思って続けています。

原田さまのレポートに、混沌とした状態を解決するための方法、解決への道筋の遠さ、加害者の側になってしまう恐ろしさという言葉がありました。

私たち患者の立場からも考え続けたいと思います。

そして、重いテーマではありますが、肩の力を抜いて遠慮なく話し合える機会があるとよいなと思います。

講義の後、立ち話でお話しできたことはとても良い時間でした。

ありがとうございました。

架け橋 清水紀子

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

架け橋 清水紀子様

原田正平です。

勝手な内容のメールに対し、丁寧にお答えいただき有難うございます。

医療事故・医療過誤の、こうしたシンポジウムなどに参加させていただくのは、いつ自分が加害者側に回るかもしれない、という恐怖、心配があつてのことです。

医療現場では、1999年の永井さんの事件や横浜市立大学での取り違え事件以降、ヒヤリハットといった小さな事故例や、事故に至らなかった間違いの報告が、ほぼすべての医療機関で行われています。

実際、そうしたヒヤリハットは、数限りなく起きていて、大きな事故につながっていないのは、たんなる幸運に過ぎないことを毎日思い知らされています。

日々の生活での、ちょっとした間違いは、全ての人間が日常的に起こしています。

ただそれが、医療現場ではなく、命のやり取りにつながっていないだけです。

・・・というか交通事故も含め、実は、すべての人間が、加害者であり、被害者である可能性をいつでももっているのですが、忘れていて、あるいは忘れないうと生きていけないのだろうとも思います。

そうした中で、私たち医療者が、日々覚悟しなければいけないのは、過ちを最小限にするのは当然ですが、それ以上に、「正直に謝る」覚悟を、常に持つことだろうと考えています。

私が、医療事故や医療過誤の話を聞き続けるのは、その覚悟のためかもしれないと、今回改めて思われました。

清水さんの経験されたことは、常に私たちの隣にあり、弱い私たちは、たぶん常に隠蔽する側に回りかねません。

そこで、歯を食いしばって、素直に首を垂れる人間になりたい、なれるだろうかと自問自答する日々です。

改めて、お話を聞かせて頂いたこと、深く感謝申し上げます。

そして清水さんご家族のお気持ちが、少しでも晴れることを願っております。ありがとうございました。

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

原田さま

おはようございます。

ありがとうございます。

私もいろいろ考えさせて頂きました。

対相手への気持ちだけでなく、その時の関り方や社会や組織の中の立ち位置、医療者という職業、いろいろ抱えての、謝る、ということ进行想像し、改めてとても重いことだと思ひました。

一方で、ひと対ひとで、向き合った時は、謝れるかどうか、というよりも、立場が逆だったらどう思うか、謝ってほしいと思うか、そう考えてもらえるだけでも、大きな変化になると思ひます。

原田さまのおっしゃる通り、だれもが場面場面で、被害者にも加害者にもなり得る世の中だと思ひました。

正直に謝れるかどうかは、医療者の方だけでなく、全ての人間が生まれ持った弱さや性の問題だと思ひます。

私もダメな人間で、日々の仕事の中で謝れないこと、隠せたらいいな、なんて思ふこともあります。

でも、小さなことからでも謝るという習慣をつけるところから始めたいなと思ひています。

架け橋の中で活動したり発言していくからには、自分もきちんとしなければならないと、本当に今回は襟を正す気持ちになりました。

原田さまのご活躍、心から応援しています。

架け橋 清水紀子